

■ 米緩和継続方針で今しばらくドルの上値は押さえられやすい…

年内最後の米連邦公開市場委員会（FOMC）は、全般に無難な内容であったと市場で受け止められた模様。同日の米株市場でナスダック総合指数が史上最高値を更新したことが、一つの証左であると考えられる。FOMC参加メンバーらによる金利見通しで「23年までゼロ金利」と予想する向きが1人減ったことをして、ややタカ派寄りとの受け止めもあったようだが、会見で米連邦準備理事会（FRB）のパウエル議長が「追加ガイダンスは経済への強力な支援が目的」などとコメントしたことで、結局は緩和姿勢継続の印象が強く残るイベントとなった。

市場では、米国の追加経済対策とコロナウイルスワクチンへの期待が日増しに強まっているものの、いまだFRBが楽観になびくわけではないことも確認でき、米株価は相変わらずの「いいところ取り」。新型「iPhone」の上位機種が飛ぶように売れるなど、米株高の資産効果は着実に現れており、いずれ米国のインフレ率は強含みになってきそうだが、ともあれ今しばらくは「リスク選好のドル売り」というパターンが引き継がれやすいと見ておいた方が良さそうである。実際、パウエル議長の会見内容が伝わってからはドルがユーロや円に対して売り戻される展開となった。

ドル/円は一時103.26円まで下押す場面があったものの、今のところ11月6日安値＝103.18円を下抜けるほどの確たる材料があるわけではなく、とりあえず同水準が当面の下値サポートとして意識されている模様である。

ただ、年末年始にかけてはコロナ感染拡大の勢いが一時的にも増すことが危惧され、一旦は103.18円処を割り込む可能性も捨てきれない。それでも3月安値＝101.18円は維持されると見られ、ここから全力でショートを仕掛けることには慎重でありたいと考える。

目的的には、103.65～70円処をクリアに上抜けてくるかどうかの一つの焦点。上抜けてくれば104円台が意識されやすくなり、再び104円台を回復した場合には12月10日高値＝104.58円を試す動きになる可能性も十分にあると見る。少なくとも、ユーロ/円や豪ドル/円などクロス円が全般に高止まりの展開を続けていることがドル/円の下支えとして機能しやすいということも再認識しておきたい。

一方、ユーロ/ドルは依然として強含みの展開を続けている。前回更新分の本欄でも注目した



通り、なおも11月初旬から形成している上昇チャンネル内での動き（左図参照）。

先週はECB理事会を控えたポジション調整の動きも見られていたが、ECBが決定した追加緩和の内容がほぼ想定通りであったことと、ラガルド総裁から拡大した資産購入枠について「必ずしも全額を使うとは限らない」との発言があったことで、理事会通過後にユーロは買い戻されることとなった。

むろん、先週11日に閉幕した欧州連合（EU）首脳会議で復興基金の運用開始によりやくメドがついたことや、英・EUの通商交渉が最終的には合意に至るとの期待がユーロを支えている側面もあるが、これらについてはいまだ流動的な部分もあると心得ておかねばなるまい。少なくとも、ユーロ圏経済の短期的な見通しはいまだに暗いままである。

なおも、ユーロ/ドルは基本的に前述した上昇チャンネル内での推移が続けると見られるが、目的的に1.2175ドル処を下抜けてきた場合は、1.2125ドル処を一つの目安に一旦下押す可能性があるとしておきたい。

(12月17日 10:30)